

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2018～2019

課題番号：18K18482

研究課題名(和文)映画学と認知心理学を融合した映像表現と視覚的注意に関する研究

研究課題名(英文)Study of viewers attention in the field of Film studies and Cognitive psychology

研究代表者

板倉 史明 (Itakura, Fumiaki)

神戸大学・国際文化学研究科・准教授

研究者番号：20415623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は映画学と認知心理学の議論を融合し、映画視聴時における観客の視線と注意の特徴を実証的かつ理論的に考察した。アイトラッカーを使い、映画におけるさまざまな演出や編集技法が実際の観客の視線移動とどのように関わっているのかを、アイトラッカーを使って考察した。また、映画研究における近年のアイトラッキングを活用した研究を、映画研究の歴史の中に位置づけ直す作業も行った。映画研究における注意の研究は1916年のミュンスターバーグによる研究にはじまり、1980年代のボードウェルによる認知主義的映画研究を経て、2000年代以降のアイトラッキング研究へとつながっていることを歴史的に位置づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、映画学と認知心理学を融合した新しい研究分野を日本で開拓した点にある。本研究は映画監督やスタッフが長年の経験で洗練させてきた表現技法や編集技法の有効性や特徴を、アイトラッカーを使って実証的に検証することができた。本研究ではまだ初歩段階の検証に過ぎないが、今後の共同研究によってより説得力のある議論を蓄積できるだろう。もうひとつの意義は、本研究を通じて、映画研究における観客の注意や視線誘導に関する技法を映画研究史的な視点から振り返った点である。このことによって1916年のミュンスターバーグによる議論から現在まで、常に映画における注意の議論が重要な論点になってきたことが確認できた。

研究成果の概要(英文)：Trying to merging film studies and cognitive psychology, this study examined viewers attention during seeing movies. This study inquired the relationship between film directors' expressions and viewers trajectories of attention during watching movies by using eye tracking device. And this study also historicized the research of viewers' attention within the history of film studies. This study summarized that this kind of research started with Hugo Munsterberg in 1916 and developed by David Bordwell in the 1980s with his cognitive approach. Then some film scholars began to utilize eye tracker from the 2000s to reconfirming what film directors practiced for a long decade.

研究分野：映画学

キーワード：映画 注意 アイトラッキング 映像 メディア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人間の視覚的注意の問題は、120年以上の歴史を持つ映画にとっても、また心理学においても常に重要な問題であり続けてきた。映画はさまざまな表現や編集の技法を駆使することで、観客たちの注意を誘導しようと試みてきた。しかしそれらふたつの専門領域の研究蓄積は遊具することはほとんどなく、それぞれ独自に進められてきたのが現状である。しかし1990年代以降、アイトラッカーが認知心理学における視線特定研究に積極的に活用されはじめると、ヨーロッパでは映画学者と認知心理学者が共同で、映画を見る時の視聴者の視線移動の特徴を解明しはじめ、大きなインパクト世界の研究者に与えた。

本研究は日本でも映画学者と認知心理学者が互いの知識と経験を持ち合い、積極的に領域融合的な研究を行い、新たな研究分野を開拓することができるのではないかと想定した。

2. 研究の目的

本研究課題は、映画をはじめとする映像を見る観客の視線運動と視覚的注意が、映画作品における映像表現や演出とどのように連関しているのかという点について、映画学と認知心理学が蓄積してきた方法論や概念を融合させつつ、アイトラッカー(視線測定器)を活用しながら実証的に解明することを目的とする。研究目的に合致する映像作品の一場面を実験参加者に見せ、視聴中の視線運動(停留点、停留時間、サッカードなど)をアイトラッカーで測定するとともに、さまざまな条件設定のもとで同種の視線実験を行ってデータを統計解析することを通じて、実験参加者が映像を見る時の注意の特徴と映像の演出効果や映像表現の特徴との相関関係を分析する。これらの実験を通じて、映像製作者が120年以上にわたり洗練させてきた表現・演出テクニックの効果や機能の特徴と意味を、科学的・実証的に分析・検証するきっかけを与えてくれるだろう。

もうひとつの目的は映画学と心理学における注意問題の研究の系譜を連関させて総合的に考察することにより、あらたな視覚的注意に関する研究史の開拓を目指すことである。映画研究のはじめ、1916年に応用心理学者のヒューゴー・ミュンスターバーグが『映画劇においてはじめて注意を映画表現の特徴だと定義した。』『映画劇』は1979年まで話据えられた書物になっていたが、1970年代以降の映画の現代化と映画学隆盛によって、再び注目され、いまでも映画理論アンソロジーに必ず掲載されるほどの注目度である。ミュンスターバーグを現代の資源から再評価することで、映画学と認知心理学の接点をさぐり、今後の共同研究をきっかけを生み出した。

3. 研究の方法

アイトラッカーを活用した視線融合の特徴については、リュミエールの初期映画や小津安二郎監督『彼岸花』などの一場面を活用し、実験を行った。優れた結果が残念ながらでなかったが、小津が画面の細部には意識を集中させてセットや小道具、俳優やエキストラの動きをコントロールしていたことが明らかになった。

また理論的には、初めての心理学的映画理論を発表したヒューゴー・ミュンスターバーグ『映画劇』における注意の問題を再考し、ミュンスターバーグは受動的注意と能動的注意を分けて映画における注意の表現を考察していたことが分かった。

4. 研究成果

一部のプロジェクトメンバー日本心理学会第78回大会において「映画における恐怖表現

本年度は映画学および認知心理学におけるアイトラッキングを活用した先行研究文献を収集し、その課題や問題点を確認するとともに、共同研究者の松本氏が現在保有しているアイトラッカー機材を活用して、試行的な実験を実施した。また愛媛大で眼球運動の専門家と意見交換し、本プロジェクトにもっとも適したアイトラッカーやソフトウェアについて検討することができた。次年度は適切なアイトラッカーおよびソフトウェアを購入し、映画作品の場面を使ったアイトラッキングの実験を開始する予定である。具体的には映画監督の演出(フレームの中のすべての要素をコントロールすること)が、実際の映画観客の視線移動とどのようにかかわっているのかを実証的に解明する実験である。これまで研究代表者は小津安二郎監督作品『彼岸花』(1958)のある場面において、実際に観客が背景に意図的に配置されている3人の通行人を見るのか(あるいは通行人を認識していたか)を実験したことがあるが、次年度はさらに実験対象とする場面を増やすとともに、比較対象として同じ映像で異なる条件の映像を作成し、実験の精度を高めた。

2年目は最終年度であり、映画学におけるアイトラッキングを活用した研究とその研究史的な背景について研究を進めることができた。具体的には、Tobii社のアイトラッカーを活用し、動画視聴時のアイトラッキングと映画作品におけるさまざまな演出や編集との関係を調査した。それらの成果は、「ヒューゴー・ミュンスターバーグの遺産と認知主義的映画研究」という論文(2020年刊行予定の書籍に分担執筆したもの)となった。論文では、ミュンスターバーグが1916年に刊行した映画理論書『映画劇 心理学的研究』において、映画における注意表現を「能動的注意」と「受動的注意」に分けて考察したが、これは現代の心理学における「トップダウン型注意」と「ボトムアップ型注意」に対応するものである。1980年代になると、認知主義的映画論を展開するディヴィッド・ボードウェルは『フィクション映画における話法(ナレーション)』(一

九八五年)において、映画観客は、映画を見る直線的なプロセスのなかで、映画が観客に提供するきっかけ(キュー)を積極的に読み取り、組み立てながら物語を理解してゆくという映画理解を基盤にして映画のスタイルの研究を行ったが、ボードウェルの映画理解は、映画が提供するすべての「きっかけ」に能動的注意を向けて認知し、物語の意味を順番に組み立ててゆくことができるような「理想的な観客」を前提とした理論(仮説)である。2000年代以降に推進された映画視聴時の視線測定研究は、観客の注意と映画の演出の関係を、実験に基づいた生理学的・認知的・心理学的なデータによって検証するようになり、ボードウェルの議論をより精緻に検証することができるようになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 板倉史明	4. 巻
2. 論文標題 ヒューゴー・ミュンスターバーグの遺産と認知主義的映画研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 映画論の冒険者たち（仮題）（東京大学出版会）	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 板倉史明
2. 発表標題 映画における恐怖表現
3. 学会等名 日本心理学会第78回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 絵理子 (Matsumoto eriko) (00403212)	神戸大学・国際文化学研究所・教授 (14501)	
研究分担者	橋本 英治 (Hashimoto Eiji) (50218418)	神戸芸術工科大学・芸術工学部・教授 (34523)	
研究分担者	山本 忠宏 (Yamamoto Tadahiro) (60441375)	神戸芸術工科大学・芸術工学部・助教 (34523)	